

序 文 なぜ位相角なのか

佐藤 史郎

この序文では、日本の外交や安全保障をめぐる議論において、なぜ「位相角^{いそうかく} (phase angle)」という分析概念が必要なのか、その背景を述べる。そのうえで、本書の構成を簡単に紹介する。なお、位相角の概念そのものについては第1章で論じる。

二項対立の思考枠組みの限界と問題点

冷戦期における日本の外交・安全保障をめぐる論議は、右／左、保守／革新、現実主義／理想主義といった枠組み、すなわち二項対立の思考枠組みの下で行われることが多かった。国内政治および国際政治におけるイデオロギー対立が色濃く反映されていたからである。たとえば、「日米同盟の肯定＝右＝保守＝現実主義¹⁾ vs. 日米同盟の否定＝左＝革新＝理想主義」という図式である。

だが³⁾、55年体制が崩壊した今日、国内政治に目を向ければ、二項対立の思考枠組みは崩壊しつつある。ここで、事例として日米同盟と自衛隊を取り上げてみよう。冷戦期、右・保守・現実主義とされる側は、日米同盟と自衛隊が日本の安全保障にとって重要であると主張していたのに対し、左・革新・理想主義とされる側はそれらを強く否定していた。しかし現在、世論調査によれば、「日本の安全を守るためにはどのような方法をとるべきだと思いますか」という質問について、「現状どおり日米の安全保障体制と自衛隊で日本の安全を守る」が84.6%、「日米安全保障条約をやめて、自衛隊だけで日本の安全を守る」が6.6%、「日米安全保障条約をやめて、自衛隊も縮小または廃止する」が2.6%²⁾となっている。つまり、日米同盟と自衛隊の重要性はいまや国民に広く認識されているのである。

また、冷戦期における自民党＝保守、社会党または共産党＝革新といったイ

デオロギー認識も世代によって変容しつつある。遠藤晶久・三村憲弘・山崎新³⁾の調査によれば、70代以上はいまも、自民党＝保守、共産党＝リベラル（もはや革新という言葉は1990年代から消えつつある）と位置づけている。ところが、18歳から29歳の若者たちは、最も保守的な政党が公明党、中間が自民党、最もリベラルなのが日本維新の会で、共産党は中間よりも保守的な位置づけにある。つまり、日本維新の会＝リベラル、自民党＝中庸、共産党＝保守と認識されているのである⁴⁾。

このように、イデオロギー認識が変容するなかで、また、日本を取り巻く安全保障環境が一層厳しくなっている今日の状況に鑑みれば、冷戦期に生まれた二項対立的な思考で日本の外交や安全保障をめぐる問題を正確に把握し、政策目標を設定することはきわめて困難となっている⁵⁾。何より、二項対立の思考にもとづく日本外交論や安全保障論には、日本がもつ政治的な選択と判断の幅を狭めてしまうという問題点がある。その結果、政策的に対応できずに行き詰まる危険性や、たとえ対応できたとしても事後対応のレベルにとどまってしまう危険性がある。

しかし依然として、日本のメディアや学界の一部では、二者択一的な枠組みで日本の外交・安全保障を議論しているといわざるをえない。たとえば、最近の事例をあげれば、日本は核兵器禁止条約を採択すべきであるという見解と、採択すべきではないという見解とに分かれている。また、辺野古での基地新設や高江でのヘリパッド建設をめぐるのは、沖縄から米軍基地を撤去すべきであるという見解と、撤去すべきではないという見解が対立している。加えて、安全保障関連法案をめぐるのは、集団的自衛権を行使すべきであるという見解と、行使すべきではないという見解に分裂したことも記憶に新しい。このような二項対立の思考にもとづく日本外交論や安全保障論は、日本がもつ政治的な選択と判断の幅を狭めてしまうのではないだろうか。

以上のような背景のもと、本書は、二項対立の図式で議論している日本の外交や安全保障のイシューをあえて取り上げ、位相角という分析概念を通じて、二項対立の図式ではとらえることのできない学術的ないし政策的論点を浮き彫りにする。

二項対立の思考枠組みの呪縛

もちろん、二項対立の思考枠組みから脱却して、日本の外交や安全保障をめぐる問題を考えなければならないという主張そのものは目新しいものではない。たとえば、現実主義／理想主義という二項対立について、北岡伸一はすでに20年以上前に次のように指摘している。

日本外交の不幸の一つは、理想主義と現実主義が対極的なものであるかのようにとらえられることが多かったことである。理想主義と現実主義は、矛盾するものではない。理想を持たない現実主義は、力を持たない。つまり現実的ではない。また、理想が人を動かす力を計算に入れない現実主義はありえない。モーゲンソーは、理想主義の対概念はシニシズムだと言っているが、正しい指摘であろう。その逆に、現実可能性を求めて苦悶していないような理想は、理想主義の名に値しないのではないだろうか。⁶⁾

最近では、添谷芳秀が「戦後日本の議論と政治を規定してきた左右対立の構図から抜け出す第三の道を考える必要がある⁷⁾」との認識の下で、「九条－安保体制」を再検討しており、大変興味深い。その他にも優れた先行研究は少なからずある。だが、本書の文脈で注目したいのは、2014年から2015年にかけて岩波書店から刊行された『シリーズ日本の安全保障』の全8巻である。これは日本の安全保障をめぐる問題を考察する総合的な論集としては約50年ぶりの試みであり、約90本の論文が収められている。責任編集を担当した遠藤誠治と遠藤乾は、第1巻『安全保障とは何か』の「なぜいま日本の安全保障なのか」と題する序論のなかで、日本の安全保障をめぐる論議の現状を嘆く。すなわち、右／左もしくは保守／リベラルは、

日本の安全保障にとって最善の政策は何かについて、本来は議論に議論を重ねなければならないにもかかわらず、両者はお互いを軽蔑し、語り合う共通言語を持たぬかのように、知識人の間ですら対話は困難を極めている。⁸⁾

日本の安全保障をめぐる議論は、「左右に分極化して交わらないまま、思考停止の行き詰まりが続いている¹⁰⁾」のだ。たとえば、「沖縄を含めた(守るべき)『日本』とは何かという議論に立ち返ることもなく、戦後追及してきた『平和主義』の思想や慣行を十分に評価することもなく、人間本位の安全保障に資するかどうかわからない政策が事実上積みあがってきている¹¹⁾」という。

本書は、二項対立の思考枠組みを超えて、思考停止の行き詰まりから脱し、日本の外交や安全保障をめぐる論議を行うべきという遠藤誠治と遠藤乾の主張に同意する。そして本書は、日本の外交・安全保障をめぐる研究をさらに発展させるべく、二項対立の思考枠組みを超えるための知、言い換えれば、対話を可能とする学術的基盤の提供を試みる。その学術的基盤こそ、第1章で示す位相角という分析概念に他ならない。

ところで、なぜ、日本の外交・安全保障をめぐる議論は思考停止に陥っているのだろうか。押村高は次のように説明している。たとえば、日米同盟と沖縄の米軍基地を重視する日本の現実主義は、「現実的な代替オプションを探し求めるのではなく、その非現実性を暴き、それを空想する観念論者を叩くこと¹²⁾」に、その存在理由がある。これは、ヨーロッパの古典的な現実主義の哲学、すなわち『「オプションを能う限り多く持っておくこと」を目指し、プルデンス（prudence＝深慮遠謀）で最善のものを選取る戦略として描くこと¹³⁾」をしない。そのため、ヨーロッパの古典的現実主義が「深慮のリアリズム」もしくは「戦略のリアリズム」であるのに対して、日本のリアリズムは「現状のリアリズム」にすぎないという¹⁴⁾。そして、「現状のリアリズムが変化や改革に対し前向きになれないのは、おそらく一時点でとらえられた現実を定常とみなし、『現実とはほとんど変わらない』と錯覚してしまうからであろう¹⁵⁾」と述べている。

二項対立の思考枠組みからの脱却

押村の指摘は肝要である。われわれは、その時々状況のさまざまな現実や可能性をふまえたうえで、最善の政策目標を掲げなければならない、ということを示唆しているからである。この点、丸山眞男のいう「可能性の束¹⁶⁾」という概念を想起せざるをえない。丸山は、政治的な選択と判断を行う際に、現実を「可能性の束」として見る重要性を指摘する。すなわち、「現実というものを固定した、でき上がったものとして見ないで、その中にあるいろいろな可能性のうち、どの可能性を伸ばしていくか、あるいはどの可能性を矯めていくか、そういうことを政治の理想なり、目標なりに、関係づけていく考え方、これが政治的な思考法の1つの重要なモメントとみられる¹⁷⁾」と述べている。

この「可能性の束」という概念は、日本の外交や安全保障をめぐる論議にお

いて、3つの重要な知的効果を生み出す。第1に、思考の相対化をもたらすという点である。「可能性の束」を重視すること、それは二項対立の思考枠組みを取り除くという作業と同義である。「可能性の束」は、さまざまな現実や可能性を検討したうえで、最善の政策目標を議論するということを意味するからだ。われわれは、「可能性の束」を通じ、二項対立の思考枠組みから脱却することで、自らの主張や見解がどのような立場にあるのかを再確認するとともに、自らの主張や見解が異なる立場の論理を理解することができよう。

第2に、思考の活性化をもたらすという点である。「可能性の束」は、現時点での最善の政策目標を検討・選択するため、他の政策目標を切り捨てることになる。しかし、その政策目標はあくまで現時点において切り捨てられたものにすぎない。やがて状況が変わりさえすれば、切り捨てられた政策目標は最善の政策目標となる可能性を秘めている。「可能性の束」は、さまざまな政策目標のなかで、どの政策目標が現時点において最善であるのかを問いかけてくるという意味で、われわれに思考の活性化をもたらす。また、「それぞれの政治上の主張が全体状況のなかでどういう機能を果たすかを見きわめ、どちらがいいかを判断することが、現代では一人一人の市民に求められる¹⁸⁾」ということに鑑みれば、思考の活性化をもたらす「可能性の束」は重要である。

第3に、第2と関連しているが、現実をつねに問い直すという点である。一時点でとらえられた「現実」を定常とみなさないということだ。いまの「現実」は多様な「現実」のなかから選ばれた1つの「現実」にすぎないからである。また、「可能性の束」は、現実主義／理想主義という二項対立のなかに潜む権力性を暴き出すことにもなる。土佐弘之は次のように指摘する。

〈現実主義／理想主義〉という優劣を含んだ分節化の論理形式そのものを問い直しながら、周辺に迫いやられ不可視の状態におかれている〈現実〉を見つめ直すことで、「現実」の変革可能性を構想していく想像力を取り戻すことが求められている¹⁹⁾。

以上の「可能性の束」とそれがもたらしうる3つの知的効果を概念化したものが、位相角である。読者は、位相角という概念を通じて、①日本の外交・安全保障をめぐる議論における自らの立場を相対化できるとともに、②日本がとるべき政策的選択肢の幅を拡大させることができよう。また、③日本の外交・

安全保障が直面する「現実」をあらためて考える機会を得ることもできよう。

議論の布石

これから本書が展開していく議論に関して、以下、3つの布石を打つことにしたい。

まず、本書は二項対立の思考そのものが悪いと主張しているのではない、という点である。二項対立の思考は、概念上もしくは論理上、緊張関係があるからこそ成立している。しかし、その緊張関係が硬直したとき、それをどのように緩和ないし解消していくのか。ここに人間の営みとしての政治の役割がある。二項対立の思考は、政治が担うべき役割を示してくれるという点で、きわめて重要な思考方式なのだ。したがって、二者択一の思考を超える試みは、場合によっては、本来緊張関係にあるべき事項から緊張を覆い隠すという危険性、坂本義和の言葉を借りれば、「弛緩喪失」²⁰⁾をもたらす危険性があるともいえよう。

他方で、二項対立の思考方式は、取り扱う問題を単純化させるため、その問題の複雑性を取り除いてしまう。問題を複眼的にみる機会を奪い去る可能性があるのだ。たとえば、沖縄の米軍基地をめぐる問題は、沖縄から米軍基地を除去すれば問題がすべて解決するというのではない。なぜなら、日本の「国家の安全保障」を維持するためにはどうすればいいのかという問いが残されているからである。また、沖縄に米軍基地を維持すれば問題がすべて解決するというものではない。なぜならば、沖縄の人たちの「人間の安全保障」を維持するためにはどうすればいいのかという問いが残されているからである。大切なのは、①沖縄に米軍基地がある国内政治および国際政治の状況とは何か、②それらの状況を克服するためにはどのような条件を満たさなければならないのか、③代替策はないのか、を絶えず模索することである。二者択一の思考枠組みでは、このような知的探求をできない可能性がある。

2つめは、本書の多くの章は中道もしくは中間の立場を評価しているが、それは折衷主義ではない、という点である。本書は、二項対立の図式を壊すことにその主眼があるため、相対立する議論の内容に耳を傾けるだけでなく、それぞれを肯定的ないし否定的に評価することもある。その結果、論理上、中道もしくは中間の立場に光を当てることになる。この意味で本書は、日本の外交・

安全保障をめぐる議論において、中道もしくは中間の立場を再評価する試みにも通じていよう。ただし本書は、相対立する立場の緊張関係を緩和もしくは解消するために、それぞれの立場がもっているよい要素を足して2で割るという折衷を行ってはいない。本書は、相対立する立場の緊張関係を認めたくて、日本の外交・安全保障をめぐる議論を展開している。

3つめは、右／左、保守／革新、現実主義／理想主義という言葉の曖昧さである。指摘するまでもなく、何が右で何が左なのか、右は保守で左は革新なのか、どのような立場が現実主義で理想主義なのか、実は非常にわかりにくい。たとえば、日米同盟を批判する者は「左」とラベリングされてしまう。しかしながら、「右」と考えられがちな「保守」のなかには、日米同盟が日本の自主防衛を妨げるという理由で、日米同盟の存在を批判する者もいる。このような「保守」は、日米同盟を批判しているがゆえに、「左」とラベリングされてしまうのだろうか。本書は、日本の外交や安全保障をめぐる議論について、どの立場が右であり左なのかといったラベリングを目的としているのではない。あくまで、二項対立の図式を驚掴みするために、右／左、保守／革新、現実主義／理想主義という言葉を用いて、いわば相対的な位置関係を示す道具として用いている。ただし、ラベリング・ゲームとならぬように、できるかぎり、相対立する立場を右／左という言葉で統一して表現するように努めた。

本書の構成

本書は、「安全保障の位相角」の概念説明（序文と第1章）とその展開に対応する4つの部で構成されている。序文（佐藤史郎）では、日本の外交や安全保障をめぐる議論において、位相角の分析概念が必要な背景を述べた。続く第1章（川名晋史）は、位相角とはどのような分析概念なのかを具体的に説明する。

そして、4領域への展開として、8つのイシュー（章）を4つのテーマ（部）で分類している。まず、1つめのテーマは「『遺産』か、それとも『選択』か」である。ここでは、第2章（川名晋史）で在日米軍基地を、第3章（古賀慶）では靖國神社を取り上げて、それぞれのイシューの位相角とその意味合いを検討する。在日米軍基地であれ靖國神社であれ、これらのイシューに関する政策の歴史的起源は、いわゆるアジア・太平洋戦争という敗戦にある。これら2つの

イシューは、敗戦の結果、日本外交や安全保障の採算すべき負の「遺産」なのであろうか。あるいは、戦後の再出発に際して、日本自らが積極的に「選択」した結果なのであろうか。

2つめのテーマは「国際社会への『貢献』とは何か」である。第4章（中村長史）は国際政治学の視点から、第5章（佐藤量介）は国際法学の視点から、それぞれ国連の集団安全保障措置への日本の参加／協力を考察する。無論、2つの章は憲法9条に関する議論を避けて通ることはできない。読者は、国際社会への「貢献」とは何か、日本はどのような国際「貢献」ができるのか／すべきなのかについて、知見を深めることができよう。

3つめのテーマは「『両義性』をどうとらえるか」である。ここでは、科学技術の軍事利用と平和利用という「両義性」について、第6章（齊藤孝祐）は主に政治の論理から、第7章（松村博行）は主として経済の論理から、それぞれ検討を行う。読者は、科学技術の両義性をどうとらえるかによって、科学研究や武器輸出をめぐる日本の外交・安全保障政策の選択の幅が大きく揺れ動くことを再認識することであろう。

4つめのテーマは「軍事と非軍事の『境界』」である。第8章（山口航）は開発協力における他国軍への支援を、第9章（上野友也）では大規模災害における自衛隊の役割を、それぞれ検討する。いずれも軍事と非軍事の「境界」に立つイシューであり、またいずれも日本の外交・安全保障における新たなイシューでもある。

以上のように、本書は8つの日本の外交・安全保障のイシューを取り扱う。その他にも領土問題や北朝鮮の核兵器・ミサイル開発問題といった重要なイシューは多数あるが、紙幅の関係上、取り扱うことはできなかった。だが、8つのイシューがいまの日本にとって重要なテーマであることに疑いの余地はないであろう。

本書は、位相角という概念を通じ、日本の外交・安全保障をみる読者の眼の構造を変えることで、思考の相対化と活性化を迫る、そのような本でありたいと思うのである。

注

- 1) 無論、これは単純な二項対立の図式である。戦後日本の外交・安全保障をめぐる思想については、酒井哲哉「戦後の思想空間と国際政治論」酒井哲哉編『日本の外交 第3巻 外交思想』岩波書店、2013年、281-311頁を参照のこと。
- 2) 内閣府政府広報室「『自衛隊・防衛問題に関する世論調査』の概要（平成27年3月）」2015年、<https://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-bouei/index.html>（2018年6月3日アクセス）。
- 3) 遠藤晶久・三村憲弘・山崎新「世論調査にみる世代間断絶」『中央公論』2017年10月号、2017年、50-63頁。
- 4) 同上、52頁。
- 5) このような認識の下で、現代の日本外交が直面している諸問題の論点を提示しているものとして、佐藤史郎・川名晋史・上野友也・齊藤孝祐編『日本外交の論点』法律文化社、2018年。
- 6) 北岡伸一「戦後日本の外交思想」北岡伸一編集・解説『戦後日本外交論集——講和論争から湾岸戦争まで』中央公論社、1995年、11-12頁。
- 7) 添谷芳秀『安全保障を問いなおす——「九条-安保体制」を越えて』NHK出版、2016年、15頁。
- 8) 1967年から1969年にかけて、朝日新聞安全保障問題調査会は「朝日市民教室〈日本の安全保障〉」のシリーズとして別冊3冊を含む計15冊を公刊している。
- 9) 遠藤誠治・遠藤乾「なぜいま日本の安全保障なのか」遠藤誠治・遠藤乾編『安全保障とは何か』岩波書店、2014年、21頁。
- 10) 同上、24頁。傍点は引用者。
- 11) 同上。
- 12) 押村高「同盟・基地・沖縄——なぜ日本は思考停止に陥るのか」『中央公論』2011年10月号、2011年、94頁。
- 13) 同上。
- 14) 同上。
- 15) 同上、96頁。
- 16) 丸山眞男「政治的判断」杉田敦編『丸山眞男セレクション』平凡社、2010年、358頁。
- 17) 同上、359頁。
- 18) 荻部直「政治的リアリズムとは何か」御厨貴・山岡龍一編『政治学へのいざない』放送大学教育振興会、2016年、170頁。
- 19) 土佐弘之「『平和のリアリズム』再考」日本平和学会編『平和を考えるための100冊+α』法律文化社、2014年、181頁。
- 20) 坂本義和「平和運動における心理と論理」坂本義和『権力政治を超える道』岩波書店、2015年、114頁。